降臨節前主日（特定２９）　王であるキリスト　　２０２２．１１．２０．

教会の暦は、一年の最後になりました。次の日曜日から、降臨節第１主日ということで、イエス様が最初にこの世に来られたクリスマスと、次に来られる最後の時を迎える準備の季節に入ります。降臨節というのは、英語でアドベントと言います。これは、「（神様が）やってくる」という意味です。カトリックやほかのプロテスタント教会は、「待降節」という言い方をして、「降りてくるのを待つ」という、どちらかと言うと、私たちが待つことに重点が置かれていますが、本来語源的には、神様が積極的にやってくることに強調点があるのです。その神様の側から来られるのを迎える準備の季節と考えましょう。

降臨節の説明はそれぐらいにして、今日は一年の最後の日曜日のことを考えなければなりません。カトリック教会は、この最後の日曜日を「王であるキリスト」という名称にして、イエス様がすべてのものを支配される王様として、世の終わりに最後の審判をすることを意識しているようです。

聖公会も、この「降臨節前主日」をどのような名称にするか、いろいろ外国では名称が提案されていました。そして日本聖公会も数年前に「聖霊降臨後最終主日・キリストによる回復」という名称がつかわれたこともありました。これは、今週の特祷「永遠にいます全能の神よ、あなたのみ旨は、王の王、主の主であるみ子にあって、あらゆるものを回復することにあります。」というお祈りから、取られたと聞いています。しかし、どうも長ったらしいなどの批判があったのでしょう。結局「降臨節前主日」だけになってしまいました。

今日選ばれている福音書は、イエス様の生涯の最後、十字架にかかった場面が選ばれています。そして、その中に兵士の言葉として「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」という言葉が出てきます。また、それに続いて、『イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。』という文章もあります。王という言葉が何度も出てきました。

ですから、今日はやはり、「イエス様が王である」ということを考えることにしたいと思います。

さて、カトリック教会は『王であるキリスト』と、この日曜日を呼んでいますが、今日の福音書は、王と呼ぶには、イエス様は全くふさわしくない、死刑囚として死んでゆく場面です。王様がこの世での権力者の位置にあるのとは全く反対に、イエス様は弱く、相手の権力によって命を奪われる存在です。

しかし、わたしたちは、この世で一番みじめに死んでゆく人の中に、王様の強い存在を感じ取りたいと思います。どうでしょうか。この弱いイエス様に、私たちは王様の風格を感じますか？

そのためには、私たちの発想を変えましょう。８月の初めごろ紹介したのですが、私たちの豊かさの定義を考え直すことができると思います。

ユダヤ人哲学者のエーリッヒ・フロムという人は、「愛するということ」という本の中で、こんなことを言っています。

『物質の世界では、与えるということはその人が裕福だということである。たくさん持っている人が豊かなのではなく、たくさん与える人が豊かなのだ。ひたすら貯めこみ、何か一つでも失うことを恐れている人は、どんなにたくさんの物を所有していようと、心理学的にいえば、貧しい人である。気前よく与えることのできる人が、豊かな人なのだ。　　（中略）　　誰でも知っているように、貧しい人のほうが豊かな人よりも気前よく与える。』

これは、与えることの中にある素晴らしい愛を表現している言葉です。

このことを、ヨハネの手紙一では、有名な聖句と一緒になって、語っています。

『3:16 イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。3:17 世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。3:18 子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。』

この徹底的に自分を与える生き方が、最も崇高で、王道をゆく、真実の生き方であることを説明するために、パウロは有名な言葉をフィリピの信徒への手紙の中に書いています。

『2:6 キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、2:7 かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、2:8 へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。2:9 このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。2:10 こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、2:11 すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。』

このことを教えるために、イエス様はたくさんのたとえ話などを使って教えられました。それを私たちは、今年の後半、夏から秋にかけてずっと学んできたと思います。振り返ってみましょう。

善いサマリア人の話はどうでしょう。あれは、自分の予定を変更して、傷ついた人のために、時間とお金を使う、親切な旅人の話でした。たくさんの富を手に入れて、それをためておく倉を作ろうとした、愚かな金持ちの話も、覚えているでしょう。

また、「不正な管理人」のたとえもありました。主人の財産を無駄遣いしているということで、訴えられた管理人の話です。自分のために、自分にあたえられた権力を利用したら、主人から叱られたのですが、失業後のことを考えて、主人に借りのある人々のために、自分に与えられた権限を使うと、損をしたはずの主人からほめられるという、不思議な話でした。

結局これらが教えていることは、私たちの富とか権力というのが、他人のために使われる時、神様からほめられるということです。そして、この生き方の究極的なものが、人類のために自分の命をささげた十字架のイエス様ということになるのです。

自分の権力を振り回す、この世の王様とは違い、イエス様は謙遜に、相手のために自分をささげる方でした。そこに、本当の王様の生き方を感じ、わたしたちがそこに望みをおく時、この回心した強盗同様に、楽園の幸いが、私たちにも約束されている、ということを確信しましょう。そして、私たちも、他人のために自分を投げ出せるものになりたいと思います。